

「月やあらぬ」をめぐる一考察

— 新古今期の撰取を中心にして —

浅岡 雅子

I

業平そして『伊勢物語』が新古今期の歌人たちに与えた影響については様々に論じられてきた。この小論は、その中の一首「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」を採りあげ、この歌の享受の在り方や変遷についてささやかな分析を試みるものである。

II

この歌が、歌論史の上で登場してくるのは、「古今集仮名序」の六歌仙評に引かれる原注の例歌三首中の一首としてである。「在原業平は、その心余りて、言葉足らず。萎める花の、色無くて、匂ひ残れるがごとし。」と評された業平歌の特質を表す歌、すなわち心情は溢れるほどあるが表現が不十分な歌、の例として引かれたのである。そして、業平の代表歌としては「世の中に絶えて桜のなかり

せば春の心はのどけからまし」(古今・春上・五三)が挙げられることが多く、「月やあらぬ」は、貫之の『新撰和歌』を始め、公任の数多くの歌論書・秀歌撰などにも採りあげられることはなかった。

この歌を秀歌として論じ始めたのは、平安末期の二人の歌人、俊恵と俊成であったことも知られている。歌林苑の主催者であった俊恵は、父俊頼の業平評価^[1]にもかかわらず、業平のこの歌を絶賛した。弟子鴨長明の『無名抄』に

俊恵云、「世の常のよき歌は堅文の織物のごとし。よく艶優れぬるは歌は浮文の織物を見るがごとし。空に景気の浮かべる也。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に嶋隠れ行く舟をしぞ思ふ
月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

キーワード…新古今期、「月やあらぬ」、『伊勢物語』四段、「余情妖艶」

これらこそ余情内に籠もり、景気空に浮かびて侍れ。」
 (「俊恵歌体定事」)

とある。俊恵は、「余情」のある歌としてだけでなく、「景気」の浮かぶ歌、すなわち視覚的なイメージをも結ばせる歌として「ほのぼのと」(古今・羈旅・四〇九)とともに賞賛したのである。

一方、俊成は、建久六年(一一九五)の『民部卿家歌合』の跋

大形は歌は必しも絵の処のもの色々のにの数をつくし、つくもづかさのたくみのさまさまのみちをえりすゑたる様のみ、よむにはあらざることなり。ただよみもあげ、うちもながめたるに、艶にもをかしくも聞ゆるすがたのあるなるべし。たとへば、在中将業平朝臣の「月やあらぬ」といひ、紀氏の貫之「しづくに濁る山の井の」などいへるやうによむべきなるべし。

と述べ、さらに建久八年(一一九七)成立の『古采風体抄』でも「月やあらぬ」と言ひ、「春や昔の」など続ける程の、限りなくめでたきなり。

と評している。建久末年頃の「慈鎮和尚自歌合」(十禅師跋)においても重ねて

ただ詠みあげたるにも、打ち詠じたるにも、何となく艶にも、幽玄にもきこゆることの有るべし。よき歌になりぬれば、其の詞姿のほかにも、景気そのひたるやうなることあるにや。……

常に申すやうには侍れど、かの月やあらぬ春や昔といひ、結ぶ手のしづくに濁るなどいへる、何となくめでたきこゆる

(二)

なり。かやうなる姿詞によみにせむと思へる歌は、近き世には有り難きことなるを、

と、貫之の「結ぶ手の掣に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」(古今・離別・四〇四)とともに理想の秀歌としているのである。

同世代の俊恵(永久元年生まれ)と俊成(永久二年生まれ)がこの歌に注目し初めた時期はいつからなのか、また、どちらが早かったのかを特定することはできない。しかし、時代がこの歌の価値を甦らせたことだけは確かなことであるように思う。新古今期の歌人たちが新たな美の世界を構築してゆく上で不可欠の作品としてこの業平歌が甦ったのは、時代の必然であったともいえる。

顕昭が『古今集註』で業平歌の注に続けて、「又、かやうにいひそらしたるを業平が歌の幽玄なることにいひて、そのやうをまねばむとおもへる人もあれど、それはまたころもことばもをよばず、よもくだりて、いとどころえがたくなむある。されば、古今序にも『在原のなりひら、その心あまりてことばたらず、しぼめる花のいろなくてにほひのこれるがごとし』といへり。上代にだにそれをとがといへり。まして末代をや。凡はこのやうをこころえて、業平が歌をも、又それならぬむかしのうたのころもことばがずならむをばおもふべきなり。」と述べているのも、新風和歌の息吹と業平歌の結びつきを感知していたからであろう。峯村文人氏は「顕昭の幽玄に関する論はあきらかに俊成の幽玄の説を批判したものである」とされた²⁾。谷山茂氏も、その説に賛意を示され、『古今集註』の成稿が文治元年(守覚法親王に奉ったのが

建久二年)であることから「業平的な歌に、切ないほど郷愁的思慕を寄せ」「そこに何か新しい価値を発掘」するような「好尚は、おそくとも文治元年ごろまでには、すでにあらわれていたのである。」と指摘されている。

俊成の後継者定家は、『近代秀歌』の中で、本歌を採るとききの留意事項を挙げる中で、「年の内に春は来にけり」、「袖ひぢてむすびし水」、「桜散る木の下風」などととも「月やあらぬ春や昔の」は「よむべからずと教へ侍りし」と記している。同じ内容が『詠歌大概』にも「如此類雖二句更不可詠之」と記されている。俊成が此の二句を秀句と考えていたこと、そして俊成のその庭訓を受け継がれていったことが分かる。俊成のこの歌への深い思いをそこに見ることが出来る。いずれにせよ業平の歌は御子左流の人々の手で新たな生命を獲得していったのである。それが新古今的な世界、定家の「余情妖艶」の世界の形成に大きく関わっていたことは、以下に述べるこの歌の享受の在り方をみても確かなことであつたといえる。

III

「月やあらぬ」を撰取した早い例として、『新古今集』に入集した深養父の作がある。

昔見し春は昔の春ながらわが身ひとつのあらずもあるかな

(雑上・一四五〇 三七)

本歌の「月」も、物語の「梅」も捨象され、季節の不变に対して

わが身の変化を嘆いた(嘆老か)だけの作であるが、新古今撰者たちは「月やあらぬ」との関わりの中で注目したと考えられる。又、『後撰集』にも顕忠母が時平に贈った「鶯のなくなる声は昔にてわが身ひとつのあらずもあるかな」(春下・八一)があり、貴族社会の恋愛や社交の場でも『伊勢物語』そして「月やあらぬ」が早い時期から受容されていた様を知ることができる。そして、そのような例として『弁乳母集』の

またのししの春、大納言まゐり給ひて、すびつのはひにてならひに

花のかのにほふにもものかなしきは

とありしに

春や昔のかたみなるらん

ときこえたれば、

という付合を挙げることが出来るかもしれない。この作の「春や昔」の句が業平歌から採り入れたものと断定はできないが、その可能性を否定することもできない。いずれにしても深養父や顕忠母の例から『伊勢物語』の受容の一端を知ることが出来るように思う。綿密な調査をすれば他の例を得ることも可能であろうが、それらについての考察は別の機会にしたいと考えている。

IV

次に新古今期とその前後の作品について若干の考察を試みたい。

ここでは、いわゆる本歌取の作だけでなく、「月やあらぬ」から

語句の一部や歌格だけを探り入れた作、あるいは『伊勢物語』四段の本説取り、面影を探り入れた作、と思われるものを含めて影響関係を見ていくこととする。影響関係の有無を決めるのが難しい歌も多いのであるが、その取捨についてはご批判を仰ぎたいと考えている。最初に詠作年代を推定して、年代順に整理したものを挙げる。論の展開上、後鳥羽院歌壇が始まった正治二年以前(建久期まで)、正治二年から『新古今集』入集候補作品の撰定作業が完了したとされる建仁三年四月以前(正治・建仁期)まで、そして、それ以後の三つの期に分けてまとめてみた。

I 建久期まで

治承四年(一一八〇)十二月二十一日(重家死去)以前

月やあらぬ春やあらぬとなげきけん人のおもひをいまでもしりぬる
重家

文治三年(一一八七)殷富門院大輔百首

梅の花なれしたもとの匂ひかな月や春ともわかぬ昔を
家隆

建久元年(一一九〇)二月十六日(西行死去)以前

月すみし宿も昔の宿ならでわが身もあらぬわが身なりけり
西行

建久五年(一一九四)(第二百首成立)以前

それながら昔にもあらぬ月影にいとどながめをしづの芋環
(新古今・秋上・三六八、第三句「秋風に」) 式子内親王

建久六年(一一九五) 良経慈鎮百番歌合

風やあらぬ月日やあらぬ物思ふわが身ひとつの荻の夕暮
慈円

建久九年十二月(正治元年三月) 御室五十首

春の夜の月に昔や思ひいづる高津の宮に匂ふ梅がえ
(新勅撰・春上・四二) 覚延

梅が香も身にしむころは昔にて人こそあらね春の夜の月
(同・四三) 俊成

II 正治・建仁期

正治二年(一一〇〇) 院初度百首

昔こそ月やはあらぬとながむなれ春さへ暮れぬわがもとの身
慈円

梅の花匂ひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ
(新古今・春上・四四) 定家

百千鳥声や昔のそれならぬわが身ふりゆく春雨の空
定家

梅が香に昔をとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる
(新古今・春上・四五) 家隆

物思へばながむる影もかはりけり月やあらぬとわれを見る
らん 宜秋門院丹後

建仁元年(一一〇一)二月 老若五十首歌合

雪やそれ雲やあらぬとうつりきて待ちえたる花に春風ぞふく
雅経

夏もなほ月やあらぬとながむれば昔にかをる軒のたちばな

家隆

秋をへて昔は遠き大空にわが身ひとつのものと月影

定家

建仁元年三月 通親亭影供歌合

梅やあらぬ袖や昔にかはらぬと思ふにふかき猶ほひかな

通親

梅が香になれぬる袖をかたしけば夢も昔の春の夜の夢

俊成

ふるさとの花や昔の春の月われもとのみにさけるやまぶき

後鳥羽院

いそのかみ春や昔の春ならでいく世になりぬやまぶきのは

新参

な やまぶきの花や昔の春ならむ野となりにけり深草の里忠良

建仁元年六月 千五百番歌合

袖の香に梅はかはらずかをりけり春や昔の春ならねども

俊成

梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春や昔の月にとはばや

(新古今・春上・四六)

通具

梅の花あかぬ色香も昔にておなじかたみの春の夜の月

俊成女

春やあらぬやどをかごと^①にたちいづれどいづくもおなじ霞

む夜の月

定家

梅も梅わが身もわが身やどもやど春や昔のとのみながめて

通親

ふるさととなりにしかども桜咲く春や昔の滋賀の花園

俊成女

やどやあらぬはなやさつきの花ならぬ山ほととぎすよそに

のみして

宮内卿

②1 年くるる春や昔の春ならぬもとの身にのみたちかへりつつ

雅経

②2 なくさむる時こそなけれ月やあらぬ秋や昔の荻の上風慈円

②3 身の憂さを月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもりく

る(新古今・雑上・一五四〇)

建仁元年八月三日 和歌所影供歌合

讚岐

②4 飛ぶ鳥のあすかの宮のきりぎりす月や昔の秋になくなり

後鳥羽院

建仁元年 八月十五日 和歌所撰歌合

②5 里はあれて月やあらぬと怨みても誰浅茅生に衣うつらむ

(新古今・秋下・四七八)

良経

建仁元年九月十二日頃 仙洞句題五十首

②6 咲き残る吉野の宮の花を見て春や昔と誰恨むらん後鳥羽院

建仁二年(一一〇二)三月二十二日 三体和歌

②7 旅衣きつつなれゆく月やあらぬ春はみやこと霞む夜の空

後鳥羽院

建仁二年九月十三夜 水無瀬殿恋十五首歌合

②8 面影のかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に

(新古今・恋二・一一三六)

俊成女

②9 今宵しも月やはあらぬ大方の秋はならひを人ぞつれなき

建仁三年四月以前 通具俊成卿女歌合

定家

③⑩ ふりにけりいざこととはんいはねまつ春や昔のみ吉野の花

通具⁶

Ⅲ 元久元年以降

元久元年（一二〇四） 賀茂下社三十首御会

故郷の春や昔の軒端より月にかをれる梅の初花 後鳥羽院

元久二年正月九日 詠千日影供百首和歌

うきながらわが身一つのもの身やあらぬ昔のなごりなる

らん

雅経

同年二月二十七日（隆信死去） 以前

秋やあらぬ月やこほりを結ぶらん光さえたる玉川の水

隆信

建永元年（一二〇六） 七月二十五日 卿相侍臣嫉妬歌合

我ぞみし御代のはじめの秋の月年は経にけりもとの身にし

て

定家

建保元年（一二二三） 十二月十八日（定家所伝本『金槐和歌集』）

成立） 以前

春やあらぬ月や見しよの空ながらなれし昔の影ぞ恋しき

実朝

承久二年（一二二〇） 成立か 道助法親王家五十首

月やあらぬ昔や誰に匂ふらん花橋ももとの身にして 家隆

承久二年 詠百首倭歌（四季題百首）

昔人月やあらぬといひしよの涙にかすむ有明の空

慈円

嘉禄元年（一二二五） 九月二十五日（慈円死去） 以前

春の夢のさむる涙の袖の上に月やあらぬととふ人もがな

慈円

寛喜元年（一二二九） 為家卿家百首

武蔵野の草のゆかりに鳴く雉子春や昔のつまならねども

俊成女

嘉禎三年（一二三七）（『檜葉集』 成立） 以前

苔の下にわが身ひとつはくちぬれど春や昔の名こそふりせ

良胤

ね

宝治二年（一二四八） 宝治百首

ながむれどわが身ひとつのあらぬ世に昔に似たる春の夜の月 俊成女

まず注目されるのは、正治・建仁期の短期間に集中的と言つて
いほどの撰取が試みられ、『千五百番歌合』で頂点に達してい
ることである。これは、「月やあらぬ」に限らず、この期間に催
された歌合、百首歌等における古典撰取に共通する傾向といえ
それまでであるが、後鳥羽院歌壇におけるこの歌への嗜好が如実
に表れているといえる。次に、歌人別に見るととき、後鳥羽院・慈
円・定家・俊成女・家隆、そして、俊成といった人々の撰取の回
数が多い。すなわち俊成の薫香を受けた御子左家周辺の人々が特
にこの歌を愛好していたことが明らかである。

それでは、撰取の在り方はどのようなものであったのか時代を追って概観してゆくこととする。

の正治初度百首以前の歌群の中で最初に挙げた六条家の重家の作は、詞書に「人々集まりて歌よみしに 被押権恋」とあり、「被押権恋」という題から「伊勢物語」の業平と高子の悲恋が念頭に浮かんでの作と思われる。業平歌の語句を引用の形で挿入した作で、新古今期の本歌取とは趣を異にしている。慈円の作は、上句の歌格と「わが身ひとつの」ということは採り入れ、「菘の夕暮れ」という新たな景物を導入して季を秋に換え、一首を再構成した作。西行作は、下句の「わが身」の繰り返しなどいかにも西行流の受容という印象が残る。

この中で注目されるのは、家隆・式子内親王・俊成の三首である。の歌群のなかでも述べたいと思うが、この業平歌の影響を考えるとき、歌だけではなく「伊勢物語」四段全体の受容が問題となってくる。物語の中から「梅の花」「梅の香」、あるいは、物語から暗示される「袖の涙」が導入され、それらの景物と「月光」が構成する世界は、一首に濃艶なまでの物語的情調を付加するものである。結論を先に述べるならそのような本説取りともいえる方法が、いわゆる新古今の象徴美、余情妖艶美といった世界を現出させる上で最も効果的であったと考えられる。

家隆歌は「遇不会恋」の作。上の句に物語から「梅の花」を、下の句に業平歌から「月」「春」「昔」を採り入れ、梅の移り香に呼び覚められた恋の喪失感を詠出したもの。習作期の作であるが新

古今的な世界に近づいていく過程が窺われる。俊成の作は、歌合(『御室五十首』から撰歌した『御室撰歌合』)において俊成自身がその判詞で「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ在中將朝臣のふることを、わづかにひろひあつめたばかりにて」と述べている歌である。業平歌から「身」「昔」「春」「月」を、物語から「梅」を採り入れ、一首を構成している。家隆の作と共に業平物語の撰取の一つの方向性を示した作といえよう。覚延の歌も俊成歌と同じ『御室五十首』における作であり俊成歌と共に定家が『新勅撰集』に入集した作。定家が二首を並べて採っていることを考えるとやはり業平歌からの影響を読みとっていたと思われる。

又、式子内親王の新古今入集歌は、『新古今集』では第三句が「秋風に」となっている作。その形では、業平歌との影響関係を指摘するのは難しいのであるが、家集(『前小斎院百首』)の「月影に」の形では、業平歌との影響を認めることができると思(う)。この歌の本歌は、やはり「伊勢物語」の「いにしへのしづの芋環繰り返し昔を今になすよしもがな」(三二段)である。「伊勢物語」の二つの段を一首に詠み込んだ作は他にも見られ、この作がその先駆的な一つであると考えられることもできる。

の正治・建仁期の歌群については、歌数が多く、紙幅の関係もありその総てに言及することはできない。撰取の方法別にまとめて若干の考察を試みることにしたい。

まず、指摘できるのは、恋・雑の歌よりも季の歌が多いことである。その多くが春の歌であるが、季節を、夏・秋、そして、冬

に換えた作もある。ここで思い起こされるのが、定家が『毎月抄』の中で「本歌取り侍るやうは、……花の歌をやがて花によみ、月の歌をやがて月によむ事は、達者のわざなるべし。春の歌をば秋・冬などによみかへ、恋の歌をば雑や季の歌などにて、しかもその歌を取れるよと聞ゆるやうによみなすべきにて候」と述べていることである。本歌の恋歌をそのまま恋の歌として採り入れた作から検討してみたい。

まずの慈円の歌は、本歌からかなり多くの表現を採り入れ一首を構成し直している。恋人を失ってしまった上に「春」という季節さえも暮れてしまったと、物語の延長上の時間を想定して詠じている。同じ慈円の②は、「月やあらぬ」の語句をそのまま採り入れているが、「春や昔の」を「秋や昔の」に変え、さらに「荻の上風」という新たな景物を加えることで恋の情趣に秋の哀れを重ねようと工夫している。「水無瀬殿恋十五首歌合」の俊成女の⑧は、「春恋」の題で詠まれた作で新古今入集歌。本歌からは「春や昔の」の句と「月」を採り入れている。物語の世界を面影として投影することに成功しているのは、業平の物語からイメージされる「袖の涙」という句の働きが大きいと思われる。「梅」の移り香や「袖の涙」が物語の面影取りともいえる作品中に用いられることで独自の世界を現出させる、そのような歌の例といえるであろう。同じ歌合の定家作⑨は本歌取りの作。本歌は「大方の秋来るからにわが身こそ悲しきものと思ひしりぬれ」（古今・秋上・一八五 読人しらず）である。本歌の秋の情趣もとり込みながら、第二句に「月やはあらぬ」の句を配することで「秋恋」

(八)

の題に適した作に仕上げている。それぞれが、本歌・参考歌に新たな視点や景物を付加することで新しき「心」を盛ろうとした作といえよう。

次に定家作⑩のように他の歌を本歌としたり、参考歌とした作を見ていきたい。定家歌の本歌は「百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく」（古今・春上・二八 読人しらず）である。業平歌から「や昔」「ならぬ」「わが身」という表現を断片的に取り込み、本歌の「ふりゆく」を掛詞として用いた技巧的な作である。又、同じ定家の歌の本歌は「寂しさに宿を立ちいでてながむればいづくも同じ秋の夕暮れ」（後拾遺・秋上・三三三 良暹）であり、業平歌からは「春」と「月」を採り入れている。この歌では「春やあらぬ」という初句の表現によって本歌より『伊勢物語』の業平歌が強く投影された作になっているといえる。この初句の働きで、詠歌主体は昔男その人である、と読者は印象づけられるのである。定家の三首はともに工夫の方向に差違がみられ、定家が業平作を様々な形で摂取しようとしていたことが知られる。

同じ『伊勢物語』の歌を本歌や参考歌として構成している歌もある。忠良の作は「深草の里」の段を、後鳥羽院作⑪や通具作⑫は「東下り」の段を組み合わせ一首を構成している。このような複数の典拠を取り込もうとした試みの中で、作品としての完成度が高いといえるのが、先に述べた式子内親王の新古今入集歌であろう。

で述べた俊成や家隆が試みたような『伊勢物語』四段の面

影を採り入れた作品を検討してみたい。『新古今集』四四から四七の四首は、独自の小宇宙ともいえる空間と時間を形成している歌群である。『正治初度百首』の定家と家隆の歌、そして、『千五百番歌合』の通具と俊成女の歌である。

定家作 は、いわゆる本歌取の歌ではない。梅の匂いと月光が袖の涙に争うように映じている様は、物語の一場面を切り取ってきたような印象を与える。耽美的なそして象徴的な美的空間を描き出している。家隆作 も本歌取とはいえないのであるが、「梅が香」「昔」「春」「月」ということばを詠み入れているため定家作より物語の投影ははつきりしている。この歌でも月光が袖の涙に映じていると詠まれている。通具作 は、「春や昔の」ということばを採り入れ、業平歌との繋がりが最も密接なものになっているが、『古今集』の「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」(春上・三三三 読入しらず)が本歌である。「誰が袖ふれし」という本歌からの表現も印象的ではあるが、「春や昔の月」という表現によって読者はやはり『伊勢物語』の世界に誘われてゆくのである。俊成女作 も「よそにのみあはれととぞみし梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」(古今・春上・三七 素性)が本歌である。この作では「梅の花」「昔」「春」「月」が『伊勢物語』を想起させる。

これらの四首はともにいわゆる本歌取とはほど遠い詠み方をしている。しかし、「梅の花」や「月光」そして「袖の涙」や「袖の移り香」「昔」といったことばの繋がりが醸し出す世界は、『伊勢物語』の世界と直結してゆくのである。四首全体が『伊勢物語』

という媒介を通して有機的に結びつき小宇宙を形成しているといえる。新古今の季の歌の特質の一つである、恋の情調を揺曳した重層的な美の世界を形成しようとする試みの形跡をここに見ることができよう。『院初度百首』の定家と家隆の新古今入集歌は、季歌に恋歌の情趣を重ね合わせることに成功した作の典型であると思われる。

他の新古今入集歌にも若干触れてみたい。良経の歌⑮は、「月やあらぬ」という句のみで伊勢物語を想起させながら、主題を「打衣」に換え、季節を秋に換え新たな世界を詠出している。又、讃岐の歌⑯でも本歌から「月やあらぬ」の句を撰取し、恋を雑に転じ、懐旧と嘆老の思いを詠み出している。このような新たな景物の挿入や主題の変換を試みた作は多い。『老若五十首歌合』では、家隆作 が季を夏とし、「軒のたちばな」を詠み入れ、定家も季を秋に転じた作 を詠んでいる。又、『通親亭影供歌合』からの作は「故郷山吹」の題に転用した例である。『千五百番歌合』でも、俊成女作 が「桜さく」「滋賀の花園」、宮内卿作 が夏の「山ほととぎす」、慈円作⑰が秋の「荻の上風」、雅経作⑱が冬の「歳暮」の心を詠むなど季節を転じたり、新たな景物を詠み入れる工夫がなされている。

定家の「春の歌をば秋・冬などによみかへ、恋の歌をば雑や季の歌などにて、しかもその歌を取れるよと聞ゆるやうによみなすべきにて候」という初心の者に対する助言もこのような実践の中から生まれてきたのだろう。

ここに列挙した三十首の中には、歌格だけを採り入れた歌から

物語の面影を揺曳させた歌まで様々の歌が詠まれていた。その総てが作品として優れているわけではない。しかし、このような多様な試行があつて始めて新古今入集歌にみられるような作品の結実をみる事ができたのである。そして、それを支えたのは新古今撰集に向けての後鳥羽院歌壇の芸術的昂揚であつたといえよう。

の元久期以降は、作品も少なく、又、詠作年代の不確かなものも多い。その中で鎌倉の將軍実朝や奈良の僧良胤などが業平歌の受容をしていることが注目される。承元三年（一一二〇九）に『近代秀歌』を手に入れた実朝がその影響の下に詠んだ歌との推定も成り立つが、詠作年代は明らかにできなかった。の雅経作は懐旧の心を、の定家作は迷懐の心を、の家隆作は花橋を付加している。又の俊成女の作は、「紫の色にさくくなむ武蔵野の草のゆかりと人もこそ見れ」（拾遺・物名・三六〇 如覚）や「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを」（源氏物語・若紫）などを本歌とし、さらに雉子までを詠み込んでいる。ここでも新たな主題に転じたり、新たな景物を採り入れたりと様々な試みがなされているのであるが、正治・建仁期の圧倒的な作品群とは比肩できるような作は創作されていない。

V

「月やあらぬ」という一首の歌に限定してその受容を概観してみたのであるが、新古今の独自の美的世界とこの歌が密接な関係

(110)

にあることをある程度立証することができたと思う。定家が『京極中納言相語』で「恋の歌を詠むには、凡骨の身を捨て、業平のふるまひけんことを思出て、我身を皆業平になして詠む」というときの業平像の典型の一つは、「月やあらぬ」を含む『伊勢物語』四段の世界から造形されたものであつたように思われる。俊成が「月やあらぬ」を評価し、そのことが次世代の定家たちに多大な影響を与え、新古今調という新たな美を形成を促す原動力の一つともなったのである。『伊勢物語』の他の段、特に「深草の里」の段についても同様なことがいえるだろう。それについては、次の機会に述べたいと考えている。

注

注1 顯昭の『古今集註』の「月やあらぬ」の注の中に、顯輔の語った話として、顯季の歌会において俊頼が「業平中将の秀歌とおぼしきはいづれぞ。世の中にたえてさくらのさかざらばと云歌許歟。此程の歌は、このおはする人々みな誦給らむものを」と述べ、顯季を驚かせたという逸話が載っている。

注2 峯村文人「幽玄美の形成過程」（『東京教育大学紀要』昭和三〇年六月号）

注3 谷山茂「谷山茂著作集二 藤原俊成 人と作品」第三章「業平と俊成」、一一六頁、「業平と俊成——幽玄追考——」（『人文研究』九巻八号）。氏は、さらに秀歌の他の一首として俊成が「ほのぼのと」を、俊成が「結ぶ手の」を挙げていることから、「両者の共通点と相違点とを如実に暗示する現象として興味深い両者」は等しく「月やあらぬ」

——それに対する両者の見方には多少の差があったとしても——をあげたのである。が、いま一首では俊成は「羣にに_レる」を、俊恵は「ほのぼのと」を採ったのである。「羣にに_レる」と「ほのぼのと」の相違は、俊成と俊恵との世界の相違でもある(同書、一三八頁)と指摘されている。又、田中裕氏は、「俊恵の余情説は『和歌九品』以来の伝統的なもので、『ほのぼのとあかしの浦の』(上品上)の歌に表徴されるとすれば、新風のそれは『月やあらぬ春や昔の』に表徴されるといつてよい。この両論を余情・景気の例歌として一括挙示してある『俊恵定歌体事』は、まさしく俊恵の未分化的立場を示すものといつてよい。」と指摘されている(『後鳥羽院と定家』第四部第十五章の注7、二八六頁、「『無名抄』『近代歌体』の問題」(昭和六十年三月『南山国文 論集』)。

注4 例えば、藤平春男氏は、『新古今歌風の形成』の中で定家の『守覚法親王五十首』における作「大空は梅の匂ひに霞みつつ曇りも果てぬ春の夜の月(新古今・春上・四〇)も又、『伊勢物語的世界である。』とされている(第二章 態度と方法 新古今の方法 二九九頁)。確かに「梅の匂ひ」「春の夜の月」というとき、『伊勢物語』の世界が想起される。しかし、このような例は他にも多くみられるため今回は、考察の対象からはずした。

注5 調査が不十分で誰であるかを突き止めることはできなかった。

注6 この歌合から、『新古今集』に入集している三首の中で、左の歌一首が通具、右の二首が俊成女の作であることから、左の作であるこの歌の作者を通具と考えた。

注7 小田剛氏も『式子内親王全歌注釈』(八〇頁)において、『伊勢物語』

との関係を認めていられる。

〔付記〕

採りあげた歌は、『新編国歌大観』『私家集大成』による。又、引用した歌論書等は、『続々群書類従』『新編国歌大観』『日本歌学大系』『歌論集一』(中世の文学)、歌論集 能楽論集(岩波古典文学大系)『歌論集』(小学館日本古典文学全集)による。一部、片仮名を平仮名にする等私に表記を変えた箇所がある。

[Abstract]

A Study of *Tukiyaaranu*:
Its Adoption in the *Shinkokin* Period

Masako ASAOKA

This paper studies the effect and relationship between *Tsukiyaaranu Haruyamukasino Harunaranu Wagamihitotuha Motonomisite* by Ariwarano Narihira and the Fourth Paragraph of *Isemonogatari* around the age of *Shinkokin*. As a result, it was ascertained that Fujiwara Shunzei, who belongs to the Gotobain world of tanka poetry, and those influenced by Shunzei, positively tried to take in *Tukiyaaranu* and the Fourth paragraph of *Isemonogatari*. The way of their introduction varies, but it also became clear that poetry works inherited by the world of *Isemonogatari* greatly contributed to the formation of what is called *Yojyo-yoen* beauty (suggestiveness of captivating beauty) in the world of *Shinkokin*.

Key words : the age of *Shinkokin*, *Tsukiyaaranu*, the Fourth Paragraph of *Isemonogatari*, *Yojyo-yoen*